

令和から江戸時代へ

172 大阪産業大学附属高等学校

私の好きな道頓堀。この街を歩くといつも一枚の看板が目につく。そこには「この橋を渡ってはいけない」と書かれているが、「橋の向こうに何があるのだろうか？」と考えずにはいられなかった。ある日好奇心を抑えきれず、橋を渡ろうと一歩踏み出した。すると橋の下から煙が立ち昇り私の視界を奪った。暫くして視界が開けると眼前には江戸時代の道頓堀の風景が広がっていた。驚きのあまり言葉を失った私は、無意識に顎のあたりを触ったが長い髭が伸びている。その髭は雪のように白い。髪もすっかり白く変わっていた。「思い出した！ここは私の住んでいた場所だ！私が生きていた時代だ！川辺で子供にいじめられていた亀を助けたお礼として知らない場所へ案内されたのだ。」三百年後の令和と呼ばれた時代の街こそが竜宮城だった。そしてあの橋が玉手箱だったのだ。しかし、時すでに遅し！私は再び夢のような令和の時代に戻ることはできなかった。